駿府雑記

五

駿台雑話巻五目録

信集

用無世に敬鬼
遊照の思ふ
詩文に評点
六義の沙汰
多銭善賈
曇陽大師
言ハ身に文
充物人を稀に

離騒の秘す
世とすべ効とすべし
倭歌に感興の益あり
作文に績書あり
文章に盛衰
寸鉄人を刺す
一日に澤
幸ふたたび

昭和二十一年九月二十八日

原通

壬子試毫の綱閣

駿臺雜話巻五

月は世々の形見

今年もはや半過ぬれば、はや秋のけしきたちて、荻吹かぜも身にしみて物あはれなる比、薄の穂に出て野辺の花も移ろひそめ、尾花束なども見えて、日ごとに夕暮の景色の例の今折ふしにつけて哀なる事、又もまつらんやうに帰らんとせし夜、翁そこへ来て、今宵の月とよし。旧酒あたゝめなどして、主も客もともに延びやかに、六人の心をいろいろさかなさはやかに、客座をまうけて。清談の露やしげき程に家人やうやく心ぬるまでまかりて、さこそ興ぜし諸客皆酔て興に入ける。其

中にも一人盃を停めて、青天有月来幾時。我今停盃一問之と李白が詩を高らかに吟じければ、又ある者是を聞つけて、人攀明月不可得。月行却与人相随といふに、又外の人々進み唱和して、皎如飛鏡臨丹闕。緑煙滅尽清輝発といふに、又其次を続けて、但見宵従海上来。寧知暁向雲間没。白兎擣薬秋復春。姮娥孤棲与誰鄰といふに、其次の句をいかにも朗吟して、今人不見古時月。今月曾経照古人。古人今人若流水。共看明月皆如此。惟願当歌対酒時。月光長照金樽裏といふにぞ、おのおの其後数献におよびて、玉山倒るるをも知らず。翁もおもしろく月をもめでしやうなれども、花の名残り月の名残りなく

さる侍るさまにて、其身につきて千載無窮の感もあることなり。ねまき六ならば月の光の方に人の老やすからんとて寝ぬ。但月を見るに緑も老て、今此世に出しまゝに、是も其時分にて八月十五夜の宴をなし、独ありて居ることなれば、武士の一丁字知らねば、月見のうへに其人のおのれに各花を見物といふ文字をしるして、其のおりをりの切口と色、奥の長さはわかりかねてさだめ、金銭にはなきてくゞ清香を含みて翁もおそれ入りぬ。かへりて今の人の世俗月を賞して光のわかるゝを見るにき、よき事あつて良夜といふ。是好もの物を合酒のもとにして遊び、つまれて楽とすれば、かのすゝきを語るよりしも、寝ぬれば又験人

雲あり月出て新々に字あり人全璧を雕句ごとに錦繡を裁
すれども風雅中を周流せず。其多く景氣のうつり変ずるを
ながめ月をながめ感ずるまでにて詩ねすれども詩の載無窮の
感なきは我儕古人を去ること遠く其人を去ること遠く
常に世を厭ふる恨中にあり月をうつして世外人を照して来て今
日まで古人の詩人もいまだ八月を詩して青を見ひ
くらべさせ古人の白新もうつるやうにそなへ月をうつしいる
も詩のやうにもおもひ高きにたちまちにはまとをうつしいる
おもふ詩人。今李白の詩月の事紀をすべて一氣に古今を周
流して青天有月来幾時と云ひ出よ氣象のうるはしき拔群な

周流して詩人豪蕩超逸なるも初唐人の及ばざるまでうつしたる
ひとり李杜とく杜甫のうつすに李白の詩古今流のあとを感ずるとやく後代を待のんを及
ぶ。荀子楚辞をよくして。徒者余弗及若吾不周とうつすに
屈子のうつすをおもひうつしたる感多くなんおもひ二句は意境
ひとつの屈子一代の知己なきをかなしみて古人を激ようのんを惜
多くおもふと一度おもひ沈てとおもひ。其世を及ぶべからざる
又其世をさる人に世わたりて家とんを同ちうすれとたのんと其
人をきのひ。雅なるのちんとなく。そなへん屈子中を限られ古今心わ
るをうつすべ大うるさ恨のきわ

ならハいよゝ感嘆して是所にこそ今も末世の前なりとそ
いひしも古代の又口のふるく月に對して今も世の人々やわらかに月
ハさも我も其世をしのびすゝやかしてやはらかに見るもその人は八
月はさらに一云ものこゝろよし　かくれてひたすらそのあはれと
月々を見し末代にもかく母をまつく心ねいかし今は世にいくく
極めし我にてそもとく爺の月に心窮の感あるもいふべし諸君
考へ見給へハさまでかたき事にもあらじ

離騒(りさう)の秘事(ひじ)

諸子聞て屈子の心もつて月を見ん人世にあれとも
今の世に爺の事を屈子ほどき心せぬ二を遺恨(いえん)にしたふべき八東者

ハ吾不聞といへるハ前にいひし世六ハ爺ことにいはひて月に
わうさんずるハ屈子のむかしをうつして離騒のことをいはしく言
中さんき故さんやかいふ諸君見ちとたかなれ幸にてあらん哥
を論し居けれさて爺楚(そ)辞ハ離騒を第一とせん屈子ハ同姓
家に生まれて楚王(そわう)の為に仕へ力を竭(つく)しけれども懐王の為に
ちかく小人の讒(ざん)を信し其忠を察せず更(さら)に罪なくして追放せらる
を痛怨(つうゑん)すれど国を思ふ心へ俗をなさず其わるゝ此祭を作りて
一篇世をなしたるハ屈子を同族(どうぞく)にて世卿の家に生まれしハ
身を潔(いさぎよ)く行を脩(をさ)め一心に奉(ほう)ぜんと思ひしかし一国の政を志た
しみにて群を抜て志を表し本せ衆芳(しゅうはう)を佩(おび)て奇服を

好ましんを系と託し仏ちかくを稽古うしん撰よりて言
のんを考えるよりてうこうばさ[illegible]
くんかをゆゆと蘭蕙とくしゆゆと芳茅よりえうあらん
ものこれんを変ゆゆ名れとこうばさて今ちくよくく撰ん国を危う
すんとを国もくゆゆ名れを国もくもさくもまりかいあんくとをを口つ
ちををかくゆゆするを国をを又国をんかを故をを思れものくくを
よりさくゆゆ湘水をくんくを移りかをくを篇をれをを御う
懐をくんを距朝の言をくを潘をくををを讃をんを神をを言ををををを
ゆをりかをくををををくをを幸かをを六今史りをを及をを位離騒
のをくをを、くくを法源をうをを東拙をんををを大切のをを法

神をんをかをを言を成離騒を秘書をを。言を秘書ををいををををを
をくを名を篇をの拙稿をを。帝高陽之苗裔を。朕皇考曰伯
庸をくを出ををを、ををを。ををを。をを名をを。
をを。又六朝の古文を地をくを。月章を成を文の王孫を名ををを。
言をんをちくを名をををくををくををををををを。
言をくんをを。乎をちを極をくをを人ををを拙をををを。歎を
をを拙を名をくを名ををを。ををを。屈をを。
ををを。ををををを。父を拙をををををををを。
をくをを。ををををを。拙をををくをを。
をくをを。をををを。白を覽換を余を于物度
を。肇錫余以嘉名。名余曰正則兮。字余曰灵均。又作

紛吾既有此内美兮又重之以脩能とあるをもて自賛すれ
ばなく屈子はこんなりしもあらし。其月贅のおそらく父なる者を大事とし
ゆゑよくあつかひしにより。嘉名などを名つけ。脩能を授けにかく。教育するの謂
なるをしらでおのれにあそしなるものとぞみて。己の世の若きを見て國をも
憂ふるの志をもて。親孝を思ふ仁孝の人を生ずして其様なりく源
きつね。甚戯の紙一のあとく中まく。死にもまく。かくらるも仏の孝字
と為仁の事なりすれどもみきてしきをわかるこそを其後なりし
八志はなくさしおく。さて屈子忠盡の事をあれ。わすと志さし此
ま屈子死して二千載に及びぬるさも離騒をよむ人其辞をのみ読
て一篇の趣をしらで此説を見るものなるもかく事其れ翁の一く離騒

とよみて忠を竭しよき所にある屈子の知己として。いそ
あくまでを論する中にも又ゝまつくるかれざれども秘事を述
しそれを悟るかくして今ある世にもわかれ多く年来し
てゆくる事を微さるまいふき人さく知るまきて遊ひもしや
いあやふく秘事のなりけるなりし。諸君此事を悟らく。容易なる
事をなきを解ひきといふ。諸家の翁もいひ解きく。右よりて離騒
とよみ人お自ら考て。先儒此論も解き考をなし。鄙き
読みてもしく。おもひよらぬ事なれ。翁もひ翁のいひおもひあまれ
あやしく共君一夜話勝讀十年書かへりてかなへの事あれ
ば見さかりく。各よ読てしひわか為さき。

遍照の恩かみ

翁又いつ[illegible]父母をうしなひ人窮してゝ父母おもふ心の
天性おのゝ自然に誠なり。古ゝに人孝子ゝ常ゝ父母を思ひ
くるを考ふに親の父母を名をわすれたるなん孝行なり、あるゝ
果し。親を父母を恥を忘さん事をおそれ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ落を百行の中ゝ[illegible]
父祖をおもふ中ゝその[illegible]
う良岑の宗貞。
深草の帝よりおくりたまひて。俗を出家。偏に遍照ゝなんゝ
しその遍照ゝ[illegible]父母を思ひ

[illegible]
すもわすれたるなん[illegible]世を捨[illegible]
父母を[illegible]
[illegible]親をすて[illegible]
[illegible]人の性を戒賊[illegible]
[illegible]一代の寵臣[illegible]人物の[illegible]
の[illegible]名郷世[illegible]の[illegible]父
母をいかゝ[illegible]
[illegible]今[illegible]窮して[illegible]
倭欲を[illegible]離騒を[illegible]父祖を[illegible]

風く頭して死して家聲を墜さるべし。我父ちちはけ一なる
佛ぶつ法ほうをなんいまだ宗旨をあきらめて世せけんつうまさに排撥
の為なりとて、なほ戒かいを受うけ髪をおろさねばこの
すがたいまだ義経ひとりに限らず遍照の歌をよみ、さうのそなたに
うまれかはるべし。

あるじ、はかなくすがたをかへ、髪をおろすこと、
是ぜひ彼の佐藤継信、忠信、父母の為に出家せし
髪をおろす、父母の為に菩提をとむらはんため
佛法に惑ひ天理に育す、六、今を始めとして
なり。責て、いとかなん

あるじ、世をすつる、身をすくへんためなり。
是、ひとへに源平盛衰記による。頼朝敵にあ
たるべし。一ノ谷、屋島、壇ノ浦、三ヶ所の敵をさつまして、すでに
自殺せんとする時、箱の中より佛の小像をとりいだし、と首を敵
に渡さんは大将軍の不覚なり。いきたるこのそなた
をかくしおくべしと、公なる事、人をうつ
きまわるべ。佛法のうへ後生をとぶらはんとおもふ。丈
夫のこころざしなり。一ノ谷、屋島、壇ノ浦、三ヶ所の
やうに、佛とさまをかへ、髪をおろすこと、
わかき身をもって人皆羞恥の人を同有すべきつまをもて

さきに遍照は父母を思ひいでゝ、かなしみなげきなどしつゝ、
とかく物し、頼朝は敵をうちつゝ、
あるひは、ふるさとも年ごとに荒てといひつゝ、

世をすてゝ身をすてゝ
さきにつゝ、遍照は世をすてゝ、
ふるさとはあらしの庭の雨ぞ
すゝ多々まとも父母はなほ思ひ出れたる故、僧侶の身となれ
ども、親は、子はなれ人をとゝ、そのか遍照は歌をもはさん
こゝろ地のおもてをあらはしきこゆれば、
なるとぬと苦は枝、かくき多よせ、若をちゝ母なるけゆゝ。

そこらの民家をあつめて、なゝうち家をあつめ、
しく垂き成、茅ふれんたう。
あわの国、阿波の国、行脚の序に、遍照は、
よ物語の多りと、其人、うゝ此物語
とうゝ、宮中に、弓馬侍、旅ちまなとこゝ、
物語り物語りもかくそこ、
作り、浦島山とそこめ、其の
うゝ、頼朝もさて、
もなく、海ゆく、
結の猫を物語りと、

四人ともせくさもぬ其後法を学ぶ。ゆゑひ育もせることなり。
其さら法高雄の文覚といひ豪猛知恵比類なし孫舎利弗と
加へて秋門は威を振ひ一方の勇士となり世の人となりて
世を一西ちはあひなれどもの者の者を尊ぶ一門や威時
あり雄ともまくれ心に比類なし文覚は富をそかし
久は文覚を法とし仏に其法は世は月は西り
月は中はんそく奉を抜て法は法は弟子とも本
お多仏ちくはは今異ひは文覚ありと一月月て紙を
奪ともあくと名仏一世は法は弟子とも法月とて五系
中を解はさとはひとひ多八文覚法は法ありを月は銭を

うの色きものなりとひ久は法は中く其人ゝ高勝は
して氣魄精神あくはあるとは法は月は法は月は情ひき
は儒乃世は仏ともさら氣は月は人あるとも真は道をきは
其竹見は法は月は大ら世をいとひく浮屠は法は法は
一久色但者とすて新説は法は佛は法は法は法は
ひくゝ法は世は捨ともは其人者は人父は法は月は
すくはは中くあるは久は牙を捨ては世とすんとはは
あるは法は名利は法は世とすて捨樂と法は法は濁八かはんど
の樂を四は法は同一は法は法は仏の教は人偏は偏は法は
八者又とすは法は法は法は仏は法は八は法は法は法は法は

一つは世の楽をなすべきをもすてゝ栄利・名利よくなるまゝに尽さんと世と共
うるおすべきを名教中に自然と事他あれども仏のこゝ必ずしも人
偏をすて事物を離るゝ人偏をすて事物と離るゝ人偏をすて
世を捨て楽を求めるを世をすてゝ楽をすてゝ
延るゝ楽欲をもいとゝ或人法をもいとゝ郷里
をもすてゝ妻子をもすてゝ月来哀慕して親族を終
めれどかゝるたぐひを甚だ多く憂ゝ後世いさゝかもなき
ゆゑ仏法をもさき業ゆゑ新仏あり婦人をいひわれる美
あるをもさきゆゑ中ごろまでも仏法を妨げとなれる
男女の道をも乱れ乱れ乱れ乱れ乱れ乱れ乱れ乱れ乱れ

あるをかなとて かなのむかしもうなれども私欲に
よりて 大なる罪障を作るべきをもすてゝ分別して
なりきるべきをもすてゝ 男女人倫をもすてゝ分別して
なりきるべきをもすてゝ 仏法をもすてゝ 僧尼をもすてゝ
ハ 俗よりもいとゝ 甚だしきを 仏法を教誡せ
ざるを 仏法を貴賤男女をいとゝ 貴きをもすてゝ
よりて 起らぬなり 此者の人をつゝ 此婦人の見識をも及ばぬなり
あるゝ人材をもつゝして 既にいく世をつゝ 世代代代
さそあるゝなり なのみなり 空のみなるのみなり

宇宙依然百代流　道喪文弊思悠々　誰知天上孤輪月長

照人間萬古愁。

詩書道廢共誰陳。邪説紛々日競新。明月似知千載恨
慇懃來照白頭人。

翁自ら此詩を述して口ずさひ給ひしが、詩の心も作人の憤しけ
る心月落河傾くに来も既にわけ知れ難は各いとまでありしね。

詩文の評品

他日続く法みを奉会せしに、各疑問事説く、詩文の論はなのふ
いはまも翁よりも、詩文も学問の餘事なりと志勢ものを
ひ、書も藝に游ぶの類とや中したまひし、八翁は詩文を論ぜ
ず、只先詩の事を論して、詩をも一言半句とらず議論すれ

及び漢魏の後の詩も、文理悠暢意思淵永にして、風雅の趣を
失はざりしが、蕭統が文選よりすべて古詩十九首を始め、楽府
歌行の詩をあつめてよりこのかた、六朝に至りて綺靡をきそひ浮
華を競ひて、風雅の體を失ひたりし、唐に至て李杜の徒
が浮そうて六朝の餘習を一洗して古風を振興せしより、今に
至る詩をよむ人は唐詩を学びて、盛唐の詩を古と
せる事遠しからず風気を写し人情をあらはしておのが風雅の残
膏剰馥にて、おのづから人を感ずるものあり。学びて性情
を吟詠する事、唐詩も捨てがたきものなり。杜甫が司馬温公杜甫
の國破山河在。城春草木深。感時花濺涙。恨別鳥驚心。といふ詩

と編して。古人は詩を意在言外を貴ぶ。山河を云ふ物
なるべき事。草木深と云ふ人なるべき事。多くは
平時慎む。貴物なりて。そもそも風月くれなる。
河流離の情。云ふて。又明月を鑒の唐詩を編
やく。風月緑衣燕。頑人赤離筆。篇。作者も言外を窮
の感あり。後世の唐人の作のごとき。漢水無春自来
やく。懐友と。いとひとも懐友の云ふ云ふは溢る潮打空城
寂寞回と云ふ興亡と。いとひとも。興亡は感言外は溢る。凡人
は體を得ることやいとしく。二字は稀なる。高妙を悟る
やすく。作る。完やく唐詩の妙。まるべし。李白の大原早

秋を賦して。霜威出塞早。雲色渡河秋。夢繞邊城月。心
飛故國樓と云ふは類は詩の雄壮は氣をもとく。杜
甫の三峽を賦して。水流心不競。雲在意俱遲。寂寞春將暮
欲歸物自私やと云ふは類は詩の深遠のもとよりて。
王維の月落江湖白。湖来天地青と云ふ。杜甫の吳楚
東南坼。乾坤日夜浮やと云ふ。孟浩然の微雲淡河漢。疎雨滴
梧桐やと云ふ。柳宗元の壁空殘月。曙門掩候蟲秋と云ふは馴
雅の調をもとく不群の思を發せり。淡は家人の云ふは淡壮の
景を写して用まわるべきなり。事盡みを含くこれあるべし
やと云ふは作者は見る創て知るべし。杜甫

の秋晨の八首を思齋の官舎諸篇とを其體とそなへたるも
各其能を盡すなり。傑作なるものなり。
中唐よりは晩唐より韋蘇州柳儀曹の外は易繫の文
章古今を卓絶すれども其詩風雅中和遠かときまして
孟郊賈島の寒瘦元稹の輕浮白居易の淺俗李商隱の僻澁
温庭筠の媚艶いたりまた詩の厄なり。其他多くは盛唐より
も入るもあまたあり。其大槩を論ずれば近體は呂格ちがて足
るあり。其古体は作者大うは聲律に拘ず高白にあらずして
性情を吟詠すれば中晩唐なれども鄭谷の雪を賦して江上晚來堪畫處漁人披得一蓑歸と作るを東坡の評して

元八村居中比詩なりとなり。柳子厚の作千山鳥飛絶萬逕
人蹤滅孤舟蓑笠翁獨釣寒江雪と云詩を引て別格のまと
いふべし。鄭谷の詩は巧にして作耳中晚唐の格なり。子厚の詩を
もて人を比するの鄙俗なるもまたなかるべし。東坡の眼力はた
しかなりとなるべし。東坡の眼力は
聽無聲と云ふ。細雨濕衣看不見閑花落地
と云ふ。盧綸の作人口に膾炙して傳るとなん。稍
雪沾衣欲濕杏花雨吹面不寒楊柳風と云ふ。清麗閑雅唱歎
味あり。盧の詩中にはまれなり。志南の詩は茶文公
の移作なるべし。其沙擊壤集とかいふ

て梧桐月向懐中照楊柳風来面上吹といふもの又一等
従容の風象わすれて有そなれとも其句の風流人家
とゝ中なり此人の俳句調景新なるも相似て如何ならんこと所よきも
えがたし盧は辞をとゝのへ志南康節ハ情をとゝのへて情よりて
わすれ難く其句新なる情を捨て新なる情を拾ふ盧は意思を含て味わ
ふ志南は意思を含て味わふ盧は人情を雅俗
共に作して人をして情を感ぜしむ今世俳諸を賤ずして
人をして多く句を唐詩と作るよりも俗腸多し此世俗行ふ巧なるハ
きくよりも俗腸を抜きて俗腸をよむよりも又世に一種偏曲無

賛の人わすれなくして楽府古詩の辞を剽掠して
なるを傲て已の家流の外一代に結なりとして卿も其
よりの猥褻流離一向に文理をなさず俳諧あるく断梗の
如し文字の性といふもの志の如く其業の人を相師祖して
文雅風流なるわすれなくして聖人の道を文雅風流なる
のときに伝て文雅風流なるを中世に道を文雅風流なる
物なくして人なるべしいかんぞ人をして俳人なるを
なかくや若けれ行ふ道を仁義中和にして結構愛
敬あるよりハ孔子世に騒客俗人に道を
ひめ今まて志ざしなくして俗人に道を行ふ人ハ

翁は戯なりとも、かりそめにも詩文を好ば、華飾をむねとするは道に遠き
ことなりといへども、其人の心術を害するにもあらず。只末にはしるべき
ものは、詩をもつて本とし、其他は一向に詩歌をすてゝ風雅の
趣をしらざらんハ、質朴にして野鄙なる方にやならん。

倭歌ハ感興の益あり

さて又我朝にも歌あり。是を倭歌といふ。詩とおなじく心をのべ
詩歌ともに同じ。中にも和歌は我朝のむかしより道
あれば文辞もやさしく、李杜諸名家の詩をよむ人にも、たとへ
読ても其心意に叶ひがたし。白居易詩のごとく倭歌
の風雅も平易にして、意ふかく実情を唐詩の上等

やしても、又あるひは長慶集をみるも学びなれ。或ハ古人の詩に
曾て浅根倚して見ては、懐風藻本朝文粋なども
新撰にも及ぶべく、五山老禅の所作ハ絶句の体に一種濃淘に
味わるゝ所あり、其ほか我朝の人の詩に倣ひ、すでに論ずれ
事なりとも、ことに倭歌のよきは、我朝の人の本性をよく情性を
吟詠するにも、やはり、詞のつゞきにより、かやうの詩歌
一首の中の詞短けれども、曲尽人情を見るに、三十一字
此国にてよむ時は、唐の詩を好むは讀んで、賈至
の早朝大明宮の詩に千條弱柳垂青瑣、百囀流鶯遶建章、剣
佩声随玉墀歩、衣冠身惹御爐香と賦したるを和して王維

二九天闕圖開宮殿萬國衣冠拜冕旒日色纔照仙掌動
香煙欲傍袞龍浮と賦し。李參議金闕曉鐘開萬戸玉階仙
仗擁千官と。迎劍佩星初落柳拂旌旗露未乾と賦し。杜甫
の旌旗日暖龍蛇動宮殿風微燕雀高朝罷香煙攜滿袖
詩成珠玉在揮毫と。法師の文章の煩赫あるがごとくあれど
用元春爭は氣象目中よりあらんかとぞ。倭歌は風
情を殆蛍燭は月よりあけるがごとくにたるべきの心を寄する一枝
しかあらんとかの花の木わかれて人を恨ぶるなるべし。
國風菅は清よく柔し。茅菅薄言采之と言采之采之と
いふがごとし。もと婦人はかなくなを用ふる

詩にあるべかりけるを。はかなくきはめて。
婦人なりとも女まさりはかなきをもあはれとみるべきよしをいへるなるべし。
もいしきもはかなき人をもあはれとみるべきよしをいへるなるべし。
しかるに大方人をいとあはれとみるべきよしをいへるなるべし。
しかるに法師の文章は我朝も唐土も同じ。幸なるかな。
よくかの氏物語は。菅原の古今集は歌を詞とされるなるべし。
おのづから一唱三歎するがごとくなり。
そもそもさいはひなるものはおのづからのものなり。
かくて。此歌を吟ずるに。老人の懷古の情を感ぜざるべし。
もはかなのやうやうわやうやう。梅の花ちるまでもあるかな

かくて此歌を吟ずるに有漢の奇拉の風を感ずし。

世中はさらぬ別もなかりけり。思ふ人のみ恋ふる

此歌を吟ずるに孝子の思親の情を感ずし。

風ふけば波もたちけり。真清水の山の井の底なる

此歌をたずるに貞婦の思夫の情を感ずし。

春ごとに花のさかりは多けれど。雪ゆゑ行く人を

ぞ待つ。此歌をたずるに君子の正志故郷の情を感ずし。

もなほ我多くして。古今集後八代集を編集わけ

ぬ。中に第一番に掌をしたる。二首なり。係念二代實朝の

歌。

実方朝臣。笑いかるもきく流の水の緑なる。

此歌を宣長翁評して。鬼とうたふ所。体いと美しく。

男性とうたふ。すくまるる奇心。あり。此體の歌は

ある人常に此歌をたしなみ。世代その重華をもちひたるを感し

て。旁氣とはもしきやうに思ひ。さくら秋のわくる

頃。月ながめ。花詠ず。歌もあり。芸ものうらとて。さかうらる

やうにおれ。花の散るを。うきゆゑ。かの詞をきたるやう

いとうなくあるとは。ゆる者。感ゆゑ。してすてわく。是二代の今歌

ゆゑ。歌首をとく例して。

久かうこれ。先のとけきおちの月よ。春ぞんちよく。第七ちの歌

明日かけ。月はいとさやかなるに。ふかきこゝろ。はるかなるこゝろ。
うちながめてわやすらはかれぬ。あるいは。
夜遊の面白さをうたへるなり。夕ぎりの。
夕さるまでつゆはいやをくに。おくれ月の。
秋風ふきぬ。雲の。あまおとしつれ月の。新のさやけさ。
洋の海の。荒波の。音をたかみ。
詞とゝのく。袖ふりつゝかけもなし。作者は。
元号は歌。ふるは音。
えらばれ。折よきまゝ。元をとる。
雪りつゝ。伝法は。俳諧よりすくれ。
つゝもうらもなし。詠をあつめ。性情をあらはす。
さるは俳歌のもとゝ。かゝるべきなり。但し後の詩は。
おのゝ一ゆゑ。おのゝ意あり。
ふかきをもきはめ。
晩唐の後は。詩のおくゝ。
なれば。
ア。義は。なけれ。なり。詩のこゝろ。

六義は。所法

唐中の。純要なる。古今集の序。
わづかに。

おもてをしやとゝいつゝ。倭歌ハ事と言葉とを
集て序をいひ。ひらがなを以て綴る。たとへハ
風雅頌賦比興とて六義也。風ハ諸国男女各己
うたをこゝろ。雅ハ朝廷の公卿大夫以下己うたを作る。頌ハ宗廟をたゝ
へ。雅といふなり。頌ハ宗廟をたゝへ。雅ハ朝廷の公卿大夫の詩。風ハ諸国
物のあはれをうたふ。なれゆくよをこゝろ。比興ハ二体とて。比ハ喩ふ
たとへ。興ハ物にかこつけ。雅頌の詩ハ長歌。比興ハ短歌。
よをこゝろ。いとゝ。歌ハ人の心を種として。万の言葉となれり。

櫻木
鶯鳩

也。三体と合せて六義とハ。三体ハ毎章詩の仕立。賦ハ事。
比ハ格別。興ハ毎章詩の仕立。賦ハ事。興ハ物。
卷耳ハ。詩ハ。
ハ。物ハ。
宮人冬蟲ハ。
婦人栢舟ハ。
きよ。
奥ハ。
うゝ。
福履ハ。

義をとりて倭歌を編するに方葉集よりのち代々の歌をこの書に収めたり
今と昔と古今の代々の歌多くこれに載せたり元を雅と
いへり國秀桑門の作又は哀歌教訓の歌あり雅といふべし
神祇慶賀の歌あり頃よりこれを用ひ又宋
廟樂歌あり方方其體又別なり其頃の倭歌
はきくあくわるくまじりたり倭歌の部立をこゝにしるす
法眼のこゝろ倭歌の體をうつすに是はいかゝ
代集の歌をうつすに景樹は情をのべ眞淵は眞をのべ稀
なるこゝろ八九歳にして中ごろ法眼は眞體をもとめ八月に
仁德帝の御即位ありしとかや

從波津をおしてこゝにいたる海路をとりて
なにはをこゆとよみ秋の末に御所をさして出ゆく秋宮よりたてまつれる
なんとかけるは其ものゝ名をよみ侍りしなり
大和にて三月の末に月のきらけき夜ども秋のなくに
とよみ人しらずの歌なり
月のうらきに雲に下葉のおれなれば人もなす
とよみ人しらずの歌なり
頼のこゝろ赫々たる人たちの體なかるべし
くわうこうの歌
見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮

経信卿のよまれし瀬の音にさへ秋の来ぬるは真かな。いかにもとおもふは
上の句に山鳥の尾をひく、いひ起しておきて下の句にてあらはす。其
下世の人はよわれ故に自から痛く花はけれどもかなしきことく。
おしてれや雅なるをすくなし、やくたたぬかたくも捨て花はなけれ
このものとよみたるは義理も此世にさまうるきといふべきか。
あし鴨のさわぐ入江の霰よみし江の世にすみかねき。我身なり
名をしとやよみれば心よ其句に申すもの事をいひおろして。下の句
みくなをさげつつ、いはまる真の體にかかるなし。すべていふと和云八
とふくよるも風雅頭のこゝのおもなし、織は真の體もさるらなられ異之
ここへるにいふ詩の字義を深く考へて。今の歌の法あるをといくさくもなく。

詩の六義とかいふ事は、かくいふ字のはもじさる八句の六義を詩
の六義が字の六義を雅の六義と差別によりて、わきせ論ずべからん。倭
歌は陽の官職律令役の事なくも見えて、象鈞なく漢唐を汝
なるく建てるまゝに。名役をて名実與語をなる事を此君の道を
倭書をよく人字を強く牽合して其親を信ぜんといふべし
云道にわかれ名を信以傳信。疑以傳疑といふにあてていつはりの
儀に似たするは明達の輔なるいふ事なし。

俳文を讀書にわきて

後数日あるとて、漢の朱今世しか我はなく、東月倭歌唐詩の
事をはしく思ひ風をとりあひ、此倭歌に、我等あるまじきのからて

学ばざるべからず。必ずしも自らうるひもとめを及ぼし、学も必ずしも自らう
作るべきも、其法を吟詠してもいまだ文
章ハそもそもなり。今聖賢の書をよみ、文辞を
求る事ハ文辞のみにあらずして、其蘊を
さぐりなり。其義を推究し、義理を論じ
すべのことなり。自然より文辞をなして書を解し、義理を論じ
ひもとき、其法をこころみしてしたがひ、
今我等あとを晩進後生文章を学ぶ者、
ならひ学ばんとすれば、前篇をむねとし、
きしかるべきハ、其義をうるやうをおしへ、

物をまなびとり、其相をよく察し、
命をしたがひ、義をしたがひ、
をよくをさめ、和合をはかり、其後学に
能ひくことと又詩文をなしゆく。
こゝにきまりなしなり。
ゆえすきをかくしてそのことをおもひ
よりて新をおしへ、法をのべ、
かくのごとくまなびて、義理ハ
独り人をくもかるべし。海行よ宋朝儒者
をもとめあくべし。

たゞ文辞を飾るのみにして常よりあり、書を閲する者、
こゝに新奇顛倒して、人事を紀し、花柳宿儒、
よりて、こゝに至る事、從容として、況や多くを渉猟するに、書
をもつて、新駁なるべし、こゝに文辞は、味を含むべきを、
自ら、飛ぶる文章も、辞なきを、塞と、或は奇険と、或は怪
僻に渉る、自ら古文辞と称して世に傲まる、太のごとくなる
事、おくれるべし、富商大賈の已の貨財多きに倚りて、籍縉家
は風流を、飾するごとく、珍異名物、かゝるを、飾らんこと
を、ねがふ、似ることもあり、
ものを、かの如きこゝろあり、
ものを、しきりに、あらはして、又は駁吃

すれば、人のこれをするこゝろ、さかんなるこゝろ、
なるべし、こゝに、漢唐の文を、讀む、其中に、文法を、
なす、今此數を、矯む
こゝろ、其能化を、こゝに、貫誼、洛安、疏董仲舒、対策
の文、韓退之、原道、歐陽永叔、原治、兵篇を、最とす、其、柳
子厚、三蘇王曾、古今大家と、称せられし人の、文章を、見るに、平易
條暢、こゝろ、こゝに、人の好む、命刑、滄溟、文、詭
異難渋、こゝに、韓柳、歐蘇、あれども、李杜、猛、
こゝに、宋明、諸家、文章を、論ずるに、韓柳、歐蘇を、宋とせざる
ハ、なし、論ずる、法象、文章、裁論、過高、して、初学、

章法句法抑揚頓挫するもの沿流に粗熟して後ち成す
べし孫莘老歐陽公と相親しみ文字に
ちく問ひ歐云ふ文無他術唯讀書多則爲之自工世人
之患在懶讀書又作文字少毎一篇出即求過人如此方有至者
痴病不必待人指摘多作自能見之爾歐陽公は言平
實にして味あり文章を学ぶものは先づ義理を
文章よりして仕ふべく捷徑もわるんとうべし爲求一後に文
とをもつて別に路なし多く讀書すべし歐陽公は言我を欺
うべからざるものは歐陽公古今文章は大家にして其言かくの如く其
上古人の為に心を盡すのみ

はひとり意をもつぱらにし文韓退之答李翊
書柳子厚答韋中立書并に蘇老泉の上歐陽内翰書とを
知るべし之を作るに行ふ者は必ず精力を讀書に
費やすべし讀書は多く著作を逸せず著作は逸せず
をもつてなるべし韓柳歐蘇の文章よりはけだし天授に
材といへども必ず讀書を資とす今吾黨の文を
辞をなすにせよ必ずや文章家とをもんとするものは常に
辞をもつてす其行ひ成すべきものは古文辞をもつて
もつぱらにし今其後生をして躁進ならしめ
常に既志著作して多く自ら文を作らず潛思讀書に
ふ

とのごとくなる因なり。もしこれを指摘の益とせば大體文字程度中にて
半ば二三五六無病を為す。又これを彼此放此とする長ずるなり。今率爾
にして不成體の文字をもつて公に呈するもこれ如何のこと。
強構作をもつて材木を偏と為し或を堂と為す。或を稼と稼と稼とせば一句の作者をもつて匠と
ふべきか。俗補すべきを多く空と忘と傾と欠と迄とあてやすし
また。今後は文字を指摘するも亦かくのごとし。爾よりあつくなる
義あらんか。如何ぞ義なるべきや。後生よつてこれをもつて他
の功と讀まるべし。古文辭は尊思せざるべからずして必ず今の氣
よりまた古人の作を見るべし。然今は脫澤なる云わるべきか。

すべき文の初めなりとなす。先儒もこれを著作を一句に廢せざるべ
もわるべし。然すれば七八の力を作るべきなり。三五の力を作るべきなり。
かくして月を積み年を積めば韓柳歐蘇のごとくにしてもまた指摘
より始まるべし。文字を作るべき熟して筆法を用ゐる
涵養なるべし。元晩してなるべし。遠しとしてなるべし。

多錢善賈

産中に作者。文章は学中を讀書を要とすべきなり。
考ずれば文章は為よりなるべき書を作るべきなり。承たく
きなり。韓退之の進学解に規とすべき作を擬するの書なり。
と姚姒とをもつて大史所錄子雲相如と為す。柳子厚の章中立

よ答ふ書よりくはしく所書を首にして太史公よ記、二子、法言
も班固以下も取りあつめたるなり。さまと韓退之の答李翊
書よ、三代漢の書よりくはしきとハ敢くよ為たるとわ、西漢書よハ
すてさしたる歐陽東坡なとの所作ハ人ゆくわ、ハ古今に
書によるさるハなり。歐陽の韓文よ学び、東坡の蘇子よ
ふとりかたの多繕共功をこそて、おくよりくはしく性のちっきとを悟入する
而あるよりてくるのもの南豊陳無己よ伯夷傳と書くよる勢
けれよ、全已そなるとのもの文法とさとるとちのもの。古人多くかくのごとし。今
伯夷傳とのもの人人ゆ。三度ちく文法と悟入ちのもの。ちっきに
帰化の人舜の所業之喻の為ちのもの東坡潁濱ちっきに父老家

なるよりくん常よ一書を枕中ありとあらんけれ、ゆく秋ても見
せきちっ。父ちっなりよ初めてうよれ、ちって見ハ至ちてけれとそ。
ゆきちのの書ちも見ハ見れ。れ、ちて世よいれ作ちっ書ときに
老家の批ひ共ちよくく世よ作ちっ作ちっ作ちっ作ちっ作ちっ作ちっ
さとわとぬも。老家ちっ作ちっ作ちっ作ちっ作ちっ作ちっ作ちっ
と繕くく悟入ちっ作ちっ作ちっ作ちっ作ちっ作ちっ作ちっ作ちっ
独舞とちっ作ちっ作ちっ作ちっ作ちっ作ちっ作ちっ作ちっ作ちっ
書ちっ作ちっ作ちっ作ちっ作ちっ作ちっ作ちっ作ちっ作ちっ作ちっ
うちっ作ちっ作ちっ作ちっ作ちっ作ちっ作ちっ作ちっ作ちっ作ちっ
く。老荘屈宋。伍淮南荀卿の書。さて丘明の國語ち作司馬

遷の史記。班固の西漢書に極めたり。其のち唐宋大家の文を熟
読する事なし。元も全集をよむ事をおもはざれば、其の時の茅鹿門の批評
まさるものなし。八家をよみたる事もなし。八大家の文をよまんとく、明の楊升庵
本わらハ、明朝諸家の文をみるに其の出所を知らず。體製衰遷して
出らく望新をも務とするゆゑ、奇怪相競ひ、靡異をもて務とした
然れバ、いそがしき説話於海、玄談為のこそ其の筆ハ謂ひなかの事ハ義理
濂洛関閩よりして文章の韓柳欧蘇にまされるをやかさへつくれ。
後世ハわろくとも文章を書く事がならぬ也。其の後は世の宋儒を称
する人ハ、己の鹿浅猥瑣の文をとりて、みだりに韓欧の文を擬するより
はじまれるなり。其の害ハ甚だしといふべし。韓ハなほなほゆるやかなり。欧陽ハいよいよ

文辞を解せねバ、文を作る事をきらひておのづからむかしの韓退之
文を作りたく人よりも人に教ハ文をつくれども、人ハ其の文ハよまず信
人のよみちからあるをとくに書を信じいはず、老子も下文の道
大學の所謂足以為道とて見る人が此の文の徳を信ずる
ゆゑ。いよいよ韓欧の文を其の書を見れバ、此の學ハ人に参るとこそ韓欧を
するものにもあれハ、程朱をも讃ると同じやうに云ふは[illegible]
なる事なれども、己の學を書きしもの甚しきといふべし。古人を學ぶにハ
なり。ミブからすらも後世よしと思はんや[illegible]

文章の盛衰

昔は古今の文章を論ずるに西漢の文章ハ奏疏

作者の外。賈誼の過秦論。司馬遷の答任安書。司馬相如の喻巴蜀檄。揚雄の解嘲。什類於後。甚文大抵雄偉高邁。後人の所
[illegible]。東漢以後。文章衰弊して振はず。初唐に至て。
俳偶を主とせり。規模荒蕪。氣象萎靡して。觀るに
足らず。唐に至て。韓退之柳子厚
二人出て。絶倫の材を以て。一生の力を以て。古今の文を陶鎔して自
一家の機杼を成す。其文上追西漢。下凌魏晉。東
坡の韓文公の碑に文起八代之衰。道濟天下之溺といひしは。道濟天
下之溺は。たゞに文起八代之衰と云ひしに異論なきまでなり。然るに
といふべき。蓋後代を靡く。衰へ。歐陽東坡の三子相繼て

振起す。文章ますます盛なり。其文光燄萬丈。又退
配韓柳。蓋さるべし。元和之間。韓柳歐蘇と文章家
大家多し。古今文章家多しといへども。人物兼備するものあれども。
さまで明朝に至て。復た文士多く。文章世に盛なり。劉基
宋濂李夢陽何景明の徒名を一時に擅にす。されども
韓柳歐蘇の文に比べ。一長あるのみ。雖其長とする所。おのおの
尚して。偏服すべし。其文章を以て。唐宋の二傳中
の徒。各一家を立て。いまだ韓柳の遺風を失はず。歐蘇
か。海波を揚ずる者なれば。文章八時運と盛衰する也。
明の中葉よりは。後稍〻衰ゆ。平易なる八鄙俚となる。簡

吉野より熙寧稿とかのこゝそこゝを五代の文章科巻帖括の習よ
ゝ古文と時文と特せ〻こゝ古文を見るにこゝさるまに所のこゝ
ひ時よ出く古文を志わ人世を学ぶ〻して後古矯俗を志ひ
韓柳歐蘇の文をこゝ赤幟とせ〻こゝ篇を揄揚し旬ゝ見
藻せざるなし。ゝ材識ゝ蘊畜深ゝさるよゝ
ゝこゝの五代文をこゝよ古よ作く古よわゝ雅よ作く雅よわゝ最
後の李燮と龍と世貞わゝこゝの平易ゝ膚俗ゝ厭ゝ
相悲の奇怪文を造作し打鼓を鞳張し洸洋自恣ゝ
一世を鼓動せ〻こゝ五代文士靡然ゝ以倣せ〻行ゝ號して文
章古と盟と稱ゝ出ゝ滄溟鳳列ゝ常に韓柳歐蘇の文章

原を稱して降よ求然ゝ出ゝ時ゝ晩年よ及ゝ文交と文
と論して後悔して平易ゝ志わゝこゝ及ゝ
ゝ錢謙益の列朝詩集よ及ゝ人作ゝ古文章を
ゝ人の王氏の集作を捨ゝ般の四部稿を作組
ゝ又風列ゝ人ゝたゝ反ゝ韓歐を毀ゝ
ゝ隱ゝ人ゝ宮ゝ作ゝ
ゝ見

曇陽大師

今ゝ人ゝ新ゝ
ゝ人ゝ義理の大筋を
ゝ今世儒者ゝ

義理を主とせざるべからざるものなれば、文章は枝葉なるものなれば、世を泥儒と称する人も、義理を筋とせざる人も、文章を質とせざりしなり。孔子の門人、言語は宰我・子貢、政事は冉有・季路、文学は子游・子夏、皆義理を質とせざりしなり。いかんや文章は質なるべきや。文章は質なるべきや。孔雅なりて文章を主とせざりしなり。韓柳欧蘇の四人、作者と文章科中の人なれども、深き義理を主とせざりしなり。義理の能通ぜざる人、中ごろ、伯韓欧を主とせざりしなり。

一代の宗人多き中、柳蘇を学ぶこと、紫色の浸淫して、紫色を柳蘇と洛学仇となるごとくなるべきなり。

一、学問あるは、既教せざるべからざるものなれば、六学の術は、今文を尤とすべきなり。その文を尤とするは、必義理を根據として、識を主とすべし。中ごろ、柳の文を主とし、深雅健渾、気格あるは、雄拔にして、蘇・韓の文は、議論振奮、比較明瞭にして、確実にして、拔群なるべし。韓欧を配して愧ざるものあるべし。明朝、弘治・正徳の間、傲然たる文章と、義理とを、世間の文を、博雅なるべきを、主とせざるべからざるなり。

その辞を矯飾して、文彩目を驚かし、変幻百出して、明眼の人、一たび見れば、その浅深を見るべきなり。滄溟・風州等の文を、二王・唐人を考ふるに、率ね俳

みして、義にも義理あるものなれば、人としてはなんぞかよはずやとて文章義理
に筆はくべきまでをもんずるの大概をつくりて伝へし二子の莫逆の
交をなしけり。月夜徴逐して詞賦をつくりて相誇る。中原二子をさして自
へのら許もよ知られの顛狂恣睢にくるしみ、征なくして鳳州
而て父王忬怨家のあるにより誣られて下獄論死せられしかば、鳳州
弟世懋と同じく棄官して長安にきたり、父の死に代らんとこひし
このゆへ、かなはざりしかば號泣跣足して柩を負て帰葬しければ
[illegible]
不[illegible]かなしき[illegible]又その淪涙もなく暴卒せしかば、六雄
浪笑の友もなく[illegible]志氣沮喪しければ忽に故態を
散

棄して釈氏に帰依し伽藍を建立し、又弇州園をつくりて日
夜賓客と其中に宴游し、歳月を消遣しけれども、なほ憂をまぎらするわ
ざなかりしに、王錫爵の女は比丘尼となりて、恬淡教門をたてしを
鳳州これが弟子となりて、甚尼をうやまひ、曇陽大師と號し、錫
爵と同じく緇盧戒食し、それより賓客を謝し、筆硯をやき、
朝夕梵誦をのみ勤めければ、人みな希有なりと称嘆す。しかれども猶
も今にして満好を忘れず、文学詩人酒客
の聞の[illegible]名を[illegible]鳳州の為
人を老へ[illegible]病を喪心の今に似て[illegible]博聞宏詞名を世に望
にあり。同「俗谷」汚衆を收る[illegible]地を見れ

るき海道北虜き海内北人物を鼓動せしハまるに仁義知
識をもて天下を傾けし法をきつるれ所なりとて世の論著
陽明を兼稱して一代の盛まやし表ハ表おもく殺明明
学中に二変を変じ義理の学中に陽明を変じ文章中に風刑
を変じ仕良知に内離存外に走る倫者分内のまを離れ風列を動くに名検を以て規矩を破り文雅風
流をもて学をもてハその言晋の清談を似くかの比あるきとの
ごとし世今世師儒と稱して法をれを編すと云て実に名
学をもて学をもて学道をもてハ二百載の下風列の聲威
をうたて世なを投し時学を收んとするハ学さるき様なし

今其師と仰ぎ学とし学とのハ程朱を排し文を編まハ韓欧
を貶し国家を半耳を執く一世人なきやに云ハ学ハ
聾を龍世貞に命を髣髴を作るとして
寸識人をし作に
後教日まして就ての事今世しハ第日文章ハ第日文章ハ
色き書行示教ましてハ彩ましてハ清益たきまハ
右清義の書ハ我学るとも日後漸ゆく常に法あり拙
ハ今改く文章ハ多ゆ漸ゆ学ん学のをなるくしやれ
ゆとハ新をまハ知学ん学きやくハ大凡書を多読ま

しとて、ものとひろめ、ものとひろめ、巻万巻に書積ゆくも、その書よりと
を精ちく、其多くは、乃ち中くに、と、ものとよ積ちて、仁の道を
この如くに、寸鉄人を殺すとく、一寸に満たぬものく、能く人を殺
すなり。長刀長矛と、いとも、なほ、なほ、なほ、なほ、なほ、なほ、なほ
むち、東坡自うち西漢書を、まんまんまで、いよいよ、治道人物地理
官制兵戎貨財の類、一遍過ぎて、また、一遍、また、また、また、また、
遍を待ちて、事々精覈なり、虞邵庵、ものとて、今
教く、積書の良法と、書を、今此法を、ものく、ものく、ものく、
遷固の史を、文章、為とて、中に、義理、事実を、貪ることなく、
多く、文章一筋を、ものとして、ものく、ものく、ものく、ものく、

一つの字、八字を、結ちく、すなわち、成ちて、ものとつきく、新しき、
用法、ものを、待ちて、その一つの字、例、文字を、用ちて、例なり、ものとは、茱萸
能、のみ、ものく、参茘、同じく、補なり、ものも、其月に、実なり、ものとは、茱萸連
同じく、深なり、ものも、その、月に、実なり、文字も、亦、ものく、勉、字勢
字同じく、ものとも、ものも、其、ものも、異なり、恪字敬字同じ
くに、ものく、ものも、其、ものも、ものく、表、別、同、別の字、音
其同、意を、表すに、同、別、よりて、其同、実を、表すに、ものく、
ものも、其、ものく、ものく、象棋を、ものく、必、月に、棋、
ものも、字、ものも、一字、ものも、一字、能、ものと、馬、兵、平、
哉、字、助、字、ものく、同、矣、ものく、ものも、ものく、ものく、

わく。疑似するもあり。どうく古人の用ひし例を考へ、彼此
をかなくたるべきなり。其二に語類字かいわるして成
語をわかる。其類一なるべし。改作に係る諸あり。義をかへ結わ
す。人此推ひに係れ結あり。事此措置に係る諸あり。古例此
語あり。法喩の諸あり。其のあけくいとうし必しも其変すす
くるあるもあり。其成結を多く記して。其中より轉化
もせり。あのたうら雅あり。て俗なるべし。其二に
鋪叙結を鋪く章段をなすべし。那分類聚のあり。交
互錯綜の所あり。之を設る者。言を布の贈とき。之を
為て其中を體裁鋪叙をなして首尾をなすべし。結撰あり

承接あり。轉折あり。収結あり。文勢抑揚頓挫係貫此等
段をなすべし。其此法をよくよめば此等をよむべし。加之
歳月此功を作べし。あのたうら自情なるべし。まとし文飾
なるべし。用字に誤らば遣語をいやしくべし。鋪叙結を體裁正く
言を為て道を論ずの脚けとするべしとうし。作は文字を
をくわるべし。設を作るべし。あるべくをくべし。同のまとせば。浮虚無
實此等きとしるべし。此文雅風流を道ずすべしよのなかの俗
をくく異なるべき。をくべし。今かくをくする人俗邪を納らして。
公を其邪なりと世人。今世の学者。をくを抑揚して実りを
んと世人。多く文辞を馳騁して虚誉を求めさるべし。学に

咏濃なる者なれば痛く懲りも打ち重なれば況や遠文
推風氣なれば其の弦なるべくして其の率なるべきは
さらなり其の道を傳へ傳へ文章なれば文辞は文章
の文章は傳はれば其の威儀文辞なれば其の文辞を
以て道とすべし孔子も禮云禮云玉帛云乎哉樂云
樂云鐘鼓云乎哉との給へり義も聖人と共に似く文と
いふ文辞とは何ぞ言ふ事なり

言は身の文

義かの如く因て文字を書する上に言ふ言は連續して
あるといふ詩を語とす彼の揖揖たる人は辞なり言は
文字なり言は文辞は文辞は言語文辞同じ
なり後世文章は文辞と云ふ文辞は偏に文章
のみを指すなり文章は文辞に分て文章は
書なり文辞は其の事なり其の事は言の訓にして
なり孔子も言は樞機榮辱の主なり君子は言
も君子は言なりと知るべし南容は白圭の
主と三復一日なるに先立て文章は云ふなり
ハなり文辞は推して言は身の文也と云ふべし

[illegible]と云ふ世に儒者と称する人多くハ[illegible]氣にして鄙倍
をきらふまたをきらふ或ハ大をきらふ或ハ女色
を愛し貨利を議し高きに委巷の[illegible]奴隷に[illegible]
[illegible]流安うあれ[illegible]多く結と雅文を著し
琴を教し笛を吹きて古人の文雅風流と[illegible]買櫃
還珠の数なるべし況や大きに似ざるものをや誰か眞の孫
孫叔敖とならんや[illegible]ふは兵家山鹿の何がしが世に士の
叔敖とすべき座客の中に[illegible]
金玉の本とは沙決するはいやしき事といふは大きなる[illegible]
[illegible]金玉[illegible]

[illegible]と云へ[illegible]嫡族[illegible]金玉を捨てハ
[illegible]きく[illegible]
兵家利害貪欲[illegible]
[illegible]士の道[illegible]
[illegible]士の義[illegible]大切なる[illegible]
し金玉を又[illegible]
生死此場金玉の本を捨てハ
[illegible]
はたらしむる[illegible]
[illegible]金玉の[illegible]
[illegible]金玉より大切なるものハ[illegible]

牙儈（仲買人）
内子（卿大夫の正妻）

金をいくらとなく貯へ給ふ。義は海内に
塵芥なきも恥んずれども古代遠かるべし。いらんや今結ぶ
ものなし。常に身代を費やし給ふ。今結ぶ
わずかに費一朋ばかりなるもあれ給きまし給ふ。
今結ぶものとなく心なきもいつも商賈わすれ居
給ふ。古中もわれすきまなし。むり小役の書わすれ給
唐代柳公権の家に入りて仕へ婢わすれ給ふ。柳家とて
揚巨源の家に住み夫人婢と買わすれ給ふ。牙儈
價の高下を競ぜずとなく。俄に驚疾を発し揚家を謝
去り給ふ。其後人ひとりなく。柳家にわすれ給ふ内子

ひずがし心の
ゆがみ　ねぢけ
たるをいふ

代角ばりなる物代價と同じ。まとき人
牙儈と價を競ぜずとなく。其後人に売る
疾を憚ることなし。柳氏ばかりの唐代世族なり。家風
いさぎよく。新進の家と格別のまなんわとけれ。さるに中唐代
後中ばかりしきまなんわとけれ。
我朝も君子国と称せられ給ふ。中たとへ風俗淳素
まして貨利を競ぜず。義を尚ぶ。
なほ。おのづから廉恥の風なく。
よかるべく風俗おきる。
常に後ろ指をさして。

[illegible]老人の物語りしは、鮮陳の時分根生徒中を教師使に行しに家貧して支度かねさるに付き八之好新奇なるを如水より銀百枚を[illegible]して後新奇に同伴してみるに[illegible]一枚を[illegible]如水対面して[illegible]人をよろこぶさきに[illegible]鯛を二枚よこして甚喜び[illegible]今吸物にして[illegible]人間[illegible]酒をすゝめ[illegible]二好盃を[illegible]て[illegible]如水[illegible]合力する[illegible]やうに[illegible]食の[illegible]鯛をもらひ[illegible]

[illegible]朋友を[illegible]浦中を[illegible]時代の古代風俗[illegible]素質[illegible]潔白なれども[illegible]義を忘れ[illegible]つき時の[illegible]幸ひつき人[illegible]の[illegible]時の[illegible]女[illegible]を[illegible]赤面する人も[illegible]武士[illegible]代わつき人の[illegible]多く八[illegible]損得の[illegible]又[illegible]奥の[illegible]一度の[illegible]八十[illegible]格別の[illegible]又甚[illegible]加賀[illegible]地家安[illegible]

真子義人と云て者六義の七友なりと云父宗女の子なり
いとけなく人となりて多く無事とすれども世よわれまいりまと
も法師なりしかば多くは彼よりわれとすれ（かへ）ども
ゝ我と時おのれ碁象戯よりなほ多くはやうちひろめ世なの
なりと信ずしかるに世人いまだかくの如くなる
かくうちあつまりしかるに又ものかきあるいまと買はく
ちまとるなりと雖ども商賈はきわて古の者のたう
くしまのきとわかつと文也の新井筑後守白石
人の時とすなくきとき人とさいてきまりなり今法
さくきとなる八合中さいりくきとわかるくしときまりとき
れ膳

新井筑後守新井白石

文廟六代將軍徳川家宣

病の唐名ときまめぐし。傳講のとき
文廟へもとしめなく信ずしなりまりとさまは
古を一ふりとまりをけく利雅膳病なる筋のまを
ハとは無擇言とてあるなりもいとなりの世儒
のいと文雅風流もとなりとは遠うし。
今見の云ひをすてく信ず文辞は事なりとなく聖賢の道ハ
こうあるとなりこの正なる僻して自ら多くまを
きとなりなりとなりこの学をとなりとなる誤なる
けうしなる請ゆく雅生厲階至今爲梗なりの謂なり。

一日の澤

冬もやうやうなりなるに雪ちりみだれ空のけしきすさまじ
雪もちらしみちもなくしぐるる空に羽たへ雁さくいとうとく
鳥の音もたえがちなるに霜はいとしろく置きまさるあけぐれ
の空もきえ入るやうなるに御前の人々もいとなつかしう
うちとけたるもきこえ給へるを御簾ばかりはかかげ給へ
るなりけり　寒がりたまへる御ぞ一襲ばかりにて
いとあつき御ぞ奉りたまへる御姿はいとあてにうつくしう
ぞ見たてまつりたまふ　人目なくあはれなるに
うちとけたまへるもいとをかしう見たてまつりたまふ
夫人の御髪の長さ五寸ばかりにて
ゆらゆらとうつくしげなるを

此のあたりの御ぞどもいとあまたかさなりたるに
いとうつくしげなる御ぞ一襲ばかりにて
なよなよとなつかしうあてやかなるを
なほ人のもとにはかくもあらじ
とまづ思ひ出でられたまふ　いとあはれなる
ものかな　かの人の御ありさまにもこの
人のかたちにもいとよく似たりしかば
ただ今の心ばへにもいとあはれ
なりしかの人の
ものしたまふ
ものかな
とのみ
思ひ
出

まなこハくらみやせんとおもひしをりふし使者来りてまうさく
まうちぎみの奥より。
六とせよあまり、中なるてしゆすみのなかばやちまちうさく、かくおやまさ
まげれバ、かまへてさくらのたもとをさしまゐらせて侍れ
思ふからいひあるを勝くあるよきのしにてまゐらせ、御出ましと思ふ
急ぎまゐりていひやるがよかくて日ならずして、後のかたへまゐりて門を
たゝきて申し、主なる人してわけされまハ、かの文まゐらせて、人例の
くはしく申すに、其心ばへ、形のおごそかさ、誠に見まゐらせて、翁まゐりし
くさむき忘れてくれて出かけてみるに、誠にまことかしこく、酒肴など
出し給ひて、庭ありもみれバ、時を移して、清談いとうれしくのみ

翁

あるじすみかのいはく、ゆるきのゝ、うきわかくよ、れそうめや
君のまへ事もなく侍らぬハ、流るゝよさこえをとめくわかく
あらば、かなひ侍らんとも、今のアヲマミもおとやゆよしと。
戯ぶれなどいひて程を経けるに、尻かけたるところに、翁をうち
歌なくてやハおるべきとて、翁に筆を授けしに、翁いやとよ
むかしハ雪月花の折にふれてハ、詩歌思ひつきもせし、今ハ
老おとろへて、其心さへうすれ、詩も歌もすべて今ハ混
まくれて、ひとへき事もなくて、ただ忘れかちに侍る
まいゝて何ともしてさうらハでこそ見なく、書に葉して。

安道不歓
晉の王子猷親
友戴安道を
雪夜に訪ねし
故事

家住駿臺下。門臨萬里流。隱雲平野樹。棹雪遠江舟。
吾老愧安道。客來皆子猷。草堂偏閑寂。喜共故人遊。

又

[illegible]

冬天衝雪到君家。此日倚欄眺望賒。兩岸水寒如夾鏡。
千林樹合似開花。

又

天從雪後海寰新。蘇素凝華光入春。清白東來誰相
似。草堂高臥是何人。

又

欲向駿臺卧雪時。行吟招隱太冲詩。古人高義今何在。
此地無君誰與期。

又

前の韻の韻と和して

高堂半僻地。積雪暗長流。歸騎迷來路。漁人滯去舟。

行藏論古道經濟問嘉猷寄語世間客誰知塵外遊
そもそもの世を逃て唱わ〜げんかくて酒酣なれば歌も今すこし
〜あ〜面白くてのまんやう〜げんこう世を紛れ散樂
謠よきく人わかう〜よ義長人を一曲とすめこの八肩上の笠ふる
影の月をつくる。擔ぎの者ども不肯の笠を折たくや
こうれわ〜げんぞれ有もつ手〜〜こうげん義はきそ折ら
よく〜ふる思ひよりまこと山家雪中の事柔とうの手〜〜ふる
やく便りよ寒く。
六出苍理三徑平。忽聞白雪入歌聲。市中除酒酒家近。
堂上閑書書帙清。玉樹玲瓏四隣合。銀沙的皪一川明。

樓何減山陰興。莫厭留談到日傾。
義諸客よ〜〜〜〜律詩八文字はそちひや〜〜や号要く
〜〜〜〜

大蜡の祭
支那にて十二月に萬神を饗する祭

八句を一つに結びつけ、其中に対句を用ひ、世間の俗と違ひ、着一書と違ひ、八韻より作る。其韻は苦しみと考へて、又其韻を相乗ずれば、其一句を作るに、今は作せり。之を唐詩と云ふ。思ふ過半は、詩の余議は、其くに、今は作せり。之を貢大蜡の祭に、一郷の人、酒宴楽して、百日は蜡の澤爾に、所知あり。民も四時稼穡を勤め、歳終に一日、酒宴楽して百日は労を忘れ、遺澤は民の

澤を答揚して不報の難を免れ仁の必ずも害なき職を
行ずるものを国家を難すと、いえんや

尤物すぐれてよきもの

尤物人を移す

気弱き者の行ひ、わしんたゞを練く叔向の母丈夫有て尤物
足に人移人荀悲徳義則必有禍といへり至て速なり
戒慎

戒慎のこゝろ、亀鑑の名言といへし、さて八徳義
の移人を伯夷の清のごとく柳下惠のごとく二たゞの間の
如なるべきにて俗夫の凡をきく者を頑夫も廉を懦
夫も志を立まわり柳下惠の凡をきくこゝろを鄙夫も寛
厚を敦しと移すべや其極を、いえば舜の韶孔子の

聖を聞て肉味を忘れ韶を聞く三月肉味を忘るゝ
如き七十子孔門に親炙して義烈の行ひ人を感
慕せしめたる其類なるべし徳義の類なる移せば
なるべし小き移を大小きの此過のわしんをも徳義
の移人をもて人を移す儀狄の酒南威の美をいへ
ども其不錦繡珠玉孫翁奇獣を以て人を移すあら
ざるなり必身を滅ぼし必名を辱しめ咎を招く古今歴々
して考へ詩文書机に満て儒者ばかりあるべし

て文翰角々[illegible]郷やる李杜摩詰詩韓歐東坡の文二王の書のあとをきゝそもそも文古今代ちがへこゝも各一種の人と為れよる名ゝのあり。ちなみに亦かあるて俳義のおもあるこの故よ古よりも詩賦とはゝ文章とは代人多くつんを投じ亦まとすてゝ[illegible]よ寝處せゝ[illegible]と為ゝよ遊戯よ書よ馳ゝて雕鏤の巧を衒ゝ[illegible]

雕鏤 文を彫手にかざるにいふ

おのゝ〳〵の養ゝのあゝん道よあゝくなるの得るあとのあゝん、ゝ[illegible]も取物衰志とゝ[illegible]の好書ゝ最ゝ[illegible]ゝ唐の太宗光明をゝ遺命して蘭亭のをを推よゝ自[illegible]と知ゝ[illegible]人あと結成文章ゝ[illegible]

ゝ[illegible]ゝ詩賦文章文の代れも[illegible]の[illegible]人ゝの[illegible]聲色の[illegible]人ゝ[illegible]ゝ人ゝて虚文ゝ[illegible]実用を志し[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ高遠を[illegible]ゝ文章を[illegible]ゝ代ゝ[illegible]詩賦文章よ[illegible]者の毒業[illegible]ゝ[illegible]ゝ毒ゝて沈病よ[illegible]ゝ人を教ゝ[illegible]詩懷よ[illegible]ゝ文章ゝ[illegible]達よ[illegible]ゝ[illegible]ゝ代ゝ必毒ゝ[illegible]ゝ詩賦文章も一種ゝ[illegible]ゝ不遠の材ゝ[illegible]ゝ月ゝ[illegible]ゝ必歳月を費ゝて[illegible]ゝ間の功を[illegible]ゝ[illegible]ゝ雑愈の文ゝ[illegible]ゝ月ゝ[illegible]叙ゝ

不遠の材をもて一古人におよひ難ゝ劣れる材を以て

とゝ多よ處若忘行若遺儼乎其若思茫乎其若迷と
こゝに翁ありおのく嘆息して曰く韓愈の為人より
まことゝ鳴呼韓愈の材とゝくんを逐ひ去りて
おのく世に聖賢と稱せらるゝ所以の学問
文辭の間よりまことゝ已に実情に強と見ること行ふ順
博遺侵の樂を見て曠し湖外に流されて時に大顛と
動こゝまことゝ故に世に長源なるものあり文章に誤
所なくおのく行ふ所ありまことゝ程朱の行文を
と、まことゝもおなじ為に文を禁絶せよ
に詩文の為人をまことゝおのく程朱道のみ

慮るまことの遠きを慕君よく思ひ知るべし六諸の六法日觸
のおそれを暗後に又義に刑戒を弟に教へ樂く流せ
ト魚に詩よ、ゝ好樂に荒良士瞿々今日に謂ふべし
樂やも此侵ふく学問に
ふるまひ見られ給の物中にとく各恭謝の體
又に冬日つゝしみ行なふ者せ
もよ義よ〳〵ふよひくよ一人門を出ることく
暮下駿臺雪滿蹊漫々平白失東西一條正路依然在
知我同行醉不迷
かく自係に〳〵とこゝに吟賞して此結有心かゝやとし

ひっぱつ
感發詩全の結風の善き

て忘れ難き家路よりの作

年よりて

朔風感發して四季を測る　年ゆくこと一日

嬉今も忘れらるゝ後日を待せんとて

有るべきを言よりも倒の人く義の起原を問ひて

為もしらぬこの頃の年の暮とく世をさとりて

こゝにゆくそめ者多く市朝より住すうち義の草堂をたのもうる

すまして行くに蕭然たる環堵の中に何とやく病よりて日と

おくるに八月のすゑ年老たるまゝ光陰さまを宗旨の

迷ひをあらんたゝ出てゆきて年を終せんと甲斐も

なく

なく

なく

多年共に教育をもとめ考へ〳〵しかる材質の庸下なるにたとへ
ば学問の文につとめざるもの〳〵その効のおのづからもとづく
汗顔なほ及ばずまた学ぶことに若輩よりまさる一あり
道をんばけ多くもなかるべしかるに此後を相ともに勉強
して日夜進益をとゝのへんとこゝろざす道をおもくする
やうこゝろすべし効を得ざるべきこゝろ義の策勵を作きゝと云ふ
用ゐるべきこゝろを奇特なるべしさもあらばまたまさに
て義の先者〳〵親すべきなり衛に我云のまゝをもて為をはめる
こゝろ〳〵佩服して忘れざるべきこゝろ我云に賢
なるべき企望きこゝろあるべしとこゝろ其老く自儆すべしあるべき年

老たる人に師法とすべきこゝろ〳〵春秋の時衛におゝく二人に大賢あり諸侯
論して衛の我云に大夫中に蘧伯玉に二賢ありと道とあるべきこゝろ真学
をなしとなし能はず〳〵年ありて四十九に非を知りて四十にして中化
すとこゝろ我云に自儆〳〵我過を用ゐるべきこゝろ求めて本後相此
て自治親切なるべきこゝろ〳〵孔門七十子中に顔曾に中に多く得べきこゝろ
とこゝろあるべしたる列国君大夫の賢
もく今も後人にして遺の集賢光輝

あるべし。今のとき種々法度・規矩をすべて[illegible]
[illegible]法度のあるべき。春秋のごとく材力よたるべ
解[illegible]して月々歩々進[illegible]古人に及ぶべき。然るに歳
月を待[illegible]材力を多[illegible]たり。摯く吸くと
して勉々不息[illegible]して日を渉り一旦
年老齢傾くに後日の懈を思ひて、いうに悔もなかるべ
あるべき。即今為[illegible]
力[illegible]大抵傷悲すとい陶淵明も中[illegible]努
再晨及時当勉勵歳月不待人と[illegible]古人も此感懐を同
じくせるなり。詩句時々吟詠して、勇進の志を振

起すべし。又世に伝る朱文公の文よ。

勿謂今日不學而有來日。勿謂今年不學而有來年。日
月逝矣歳不我延。嗚呼老矣。是誰之愆。

此文本集に見えず。朱子家訓に自棄の文なるべし。朱子
[illegible]此少作に又を後人に擬作せし。若し朱子の作なるもあらん
[illegible]作の作にもせよ。言[illegible]て意も明白なるべし。[illegible]
[illegible]自警[illegible]
陶侃の語なり。大禹聖人乃惜寸陰。至衆人當惜分陰。豈
可佚遊荒廢。生無益於時。死無聞於後。是自棄也と云へ
り。[illegible]志[illegible]の作[illegible]の詩も[illegible]祖

以来此家ハ[illegible]と思ひ[illegible]人と中[illegible]
きこと此[illegible]時[illegible]意[illegible]ハ[illegible]
陶侃
惰[illegible]ハ[illegible]君も此陶侃[illegible]
激昂[illegible]夜[illegible]勉[illegible]
[illegible]
[illegible]

を勉むべし。学者勉励を要とし、多く急ぎて迫切なる習
たるべし。義理を涵泳を貴ぶ。後ゆるくして懈弛なる故戒む。迫切
なる故弛なる故、学者進脩に緩急相情ずる宜
しかるべし。程子の言に、志道懇切固是誠意若迫
切不中理則反為不誠。又曰、人謂要力行亦只是淡泊語這一
點意氣能得幾時了。諸君程子此言を思ふ。為の法あるべし
とおもふべきなり。

壬子試筆の詞　附

月月樂ふ駒の隙過ぎ。白駒の隙過ぎ。衰病日に侵して、黄金は
価なし。さて馬は太馬なるべしとも思はざるべし。

こゝに老は既に七十あまりの春を
なりぬ。わが身は衰疾を帰くるに及べり。
況や勤学は蓋し生涯の事なり。
之を春園を窮めるに、黄は董生を学ぶ
之を春園を窮めるに、黄は董生を学ぶ
つたる故、黄は董生を学ぶ。園の中なる樹
むすぶを、園の中なる樹、園の中なる樹
しかるに学問の密なる事を所なる甲斐あるべし。程朱は遠き
こゝに鄒魯の風を多くし。韓歐の文を出だすべし。邯鄲は
歩を学ぶ。老は徒に毀誉を問はず。さるにも多くの年月は
徒に世の塵を、かゝる者根を洗ふ。塵蔡業は

うゝ之を貴とやいうん所とやいさん歟と富貴て流の所を
禍偽を糾ふ繩とあらくとなるあつ多くまあくきゆよ
多く吾聖人の建給へる綱五常の道乃ち天地と並び古今
の通てなる所ハかなとあるくらん人として作き
ふへきを此道をうゝ知ものも儒教世に行なきさとしよと
人く義ならくとく利欲よさとかるなれよ常の道ならたまて
風俗自ようくなるけうなるとをあるきをあるく
一代の風教を維持せんとするもの力をうつへきるあらんハ
ゆ蚍蜉の樹を撼うゝ精衛の海を填むに似たるくしさハとと
世を憂民を彩とするも吾儒分内のまやるを代先を度外に

をくきるもあらんハいうかるを所世に老佛宿儒と稱る人の始て
実流を肆みゝ又を他道を雜へくに仁義の常の所ハ
ゆするこをくらけるを多く勞て彩をと競く俗耳を惑しめ
附ゆに投するかするくゝいとに惜きまやをを古人のいをゆ阿
世曲学のやうくを偽学ゝ弟ゝ多くくゝ人をさもあるハあき
彼風俗を背ゆよあらんなるもの所ゆをとを
仁義の道とをるを法ゝ其儒の模範を考くゝ四ふを責
て儒とかのくゝ志ともいふへくを考ゆあらんを乃
初とくゝ人を学ん志ゆの徧を万代といをふ中に我たく
人常の道をんをゆくゝいるもかをを所ハ用をたき教を道を

やうく かくやん 筆とる 後世の道を 為 しるし。
しもつ かはのてゆ むさすよ おのの 人作の道を 為 しるし。
此 筆記 ハ 去る 辛未 冬 初 ハ 二 流生 と 名 ス
雑話、我書集 ひとくたり 壬子 年 より 筆 を 起 して 稿 を 脱 し ぬ と 云 ふ
吾黨 よ の 作 ハ 序 後 年 を 有 ら ば 一 助 ま ん か
し よ ま く た り 試 毫 ハ 筆 を 隅 して 終 ま く 後 ハ よ
ア く 壬 窮 よ お よ の 名 を 書 し け れ ば と 也
享保 壬子 年 冬 十月 鳩巣 記
駿臺雑話巻五 畢

安政三丙辰年 仲夏 正

江戸日本橋通壹町目 須原屋茂兵衛
同二町目 山城屋佐兵衛
尾州名古屋本町七町目 永樂屋東四郎
京二條東洞院上ル 田中屋治助
大阪心齋橋安土町南ヲ入 河内屋太助 板

三都 書肆